

# 関西大学博物館所蔵合子形石製品の観察

細川 晋太郎

## はじめに

関西大学博物館が所蔵する合子形石製品について資料紹介を行う。今回紹介する資料は『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, & c., OF JAPAN』〔T. KANDA 1884〕、『本山考古室要録』〔末永1935〕、『博物館資料図録』〔関西大学博物館1998〕に掲載されている合子形石製品1点である。出土地についてはいずれの文献にも記載がなく、不明である。

## 1. 検討資料の概要

合子形石製品の身で、四方に脚を有する（図1）。蓋は現存しない。口縁部には若干の欠損がありパテ等で補填している部分が確認できるが、全体の形状を把握できるほど遺存している。最大高5.9cm、最大幅8.9cm、口径最大幅6.3cmである。材質は硬質の碧玉で、色調は全体的に濃い緑色を呈する。

側面には全体的に丁寧な研磨が施されており光沢がある。下面は体部、脚部ともに丁寧な研磨が施されており、側面と同程度の光沢がある。内面においては、底部および側面に削り抜く際に生じたと考えられる回転痕が確認できる。その痕跡からは、円筒形の工具が使用されたものと判断できる。内面は石材を削り抜いた後に研磨が施されているものの、外側面や下面に比べて処理が粗く、光沢の度合いは弱い。

全体の形状は、口縁部から脚部に向かって末広がりになるもので、口縁部の下には受け部を兼ね備えた匙面帯がめぐり、体部の中ほどでは、二つの凸帯と三つの凹帯からなる装飾帯がめぐり（以下、二重凸帯）、これを境に上部区画と下部区画に分かれる。体部下端には匙面を持つ方形区画を挟むように、線刻による縦条を刻んだ凸帯がめぐり（以下、縦条凸帯）。方形区画は脚部直上にあり、四方に位置する。また脚部の外面には、匙面が二段にわたって施されている。

口縁端部から5mmほどのところには紐孔が向き合うように二つあり、その開口方向は脚部と脚部の間を通すように位置している。紐孔は匙面帯の直上から内面底部側に向かって斜めに開けられている。内面側よりも外面側のほうが紐孔の幅が広いこと、外面側からの片面穿孔と判断できる。

## 2. 製作工程の復原

製作工程を復原するにあたっては、製作時に生じた剥離や研磨における摩滅などによる製作における前後関係の痕跡を抽出することが前提となる。本資料においては線刻および匙面を施した

際に生じた剥離や傷および研磨による摩滅などが確認できる。ここでは製作時に生じたと判断できる加工痕跡を観察し、製作工程を復原する。

**加工痕跡の観察** 体部下端に位置する縦条凸帯を形成する工程において、縦条を刻む際に生じた工具痕が縦条凸帯上部および体部下面にまで及んでいる状況が確認できる（遺物写真④⑤）。また、体部下面には縦条を刻む際に生じたと考えられる剥離がある。そのため、縦条凸帯は縦条凸帯上部および体部下面を作り出したのちに、線刻を施し縦条凸帯を形成していると判断できる。縦条凸帯の下側には所々に剥離が生じており、縦条は概ね上から下に向かって削り込まれたものとする。

上部区画には口縁部下端の匙面帯を作り出す際に生じた剥離と二重凸帯を作り出す際に生じた剥離が確認できる。また、下部区画においても二重凸帯を作り出す際に生じた剥離が所々に確認できる（図1）。したがって、上部区画、下部区画はともに体部をめぐる匙面帯および二重凸帯が形成される前には作り出されていたと判断できる。

紐孔は外面側において孔のまわりに剥離が生じていることから、口縁受け部を作り出したのちに穿孔されたことがわかる。また、内面の削り抜きに関しては、製作工程上最も原体に対して破損や亀裂が生じる危険性が高いと考えられる。したがって、内面の削り抜きは他の部分の加工よりも早い段階で達成されたものと推測できる。

**製作工程** 以上の観察結果を整理すると、概ね次のような製作工程となる（図2）。

- ①原材料を削り出し、合子形石製品の大きさにする。
- ②内側を円筒形工具で削り抜く。下面を削り出し、脚部を作り出す。
- ③口縁部を削り出し、受け部を作る。また、体部を削り出し、凸帯を作り出す。
- ④凸帯を削り、匙面帯および二重凸帯を作り出す。また、脚部の外側面を削り、匙面を形成する。
- ⑤体部下端をめぐる凸帯に縦の線刻を入れ、方形区画を挟んだ縦条凸帯を作り出す。
- ⑥口縁部付近に紐孔を開ける。仕上げの研磨。

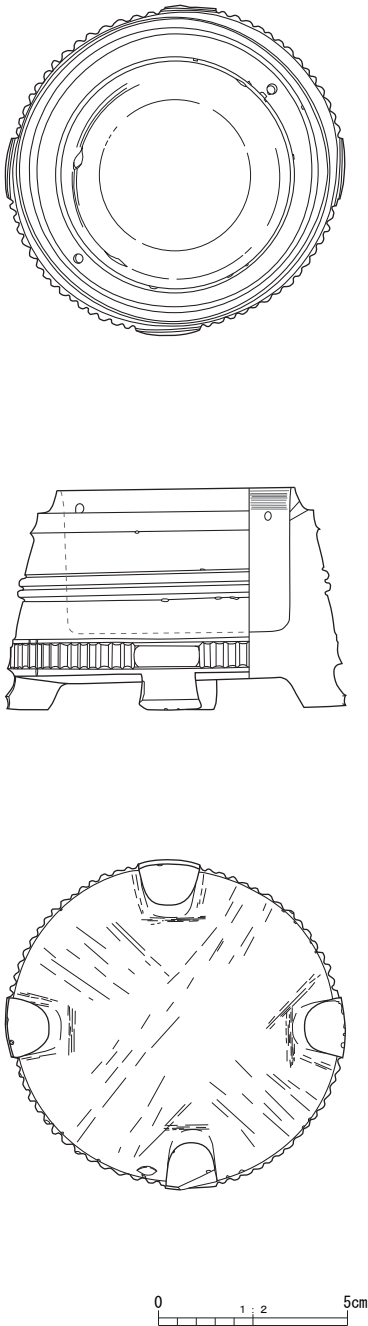
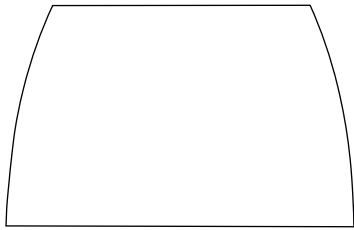
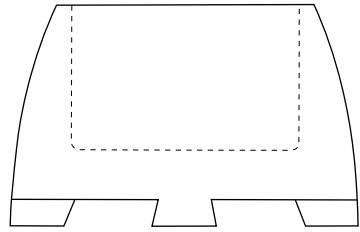


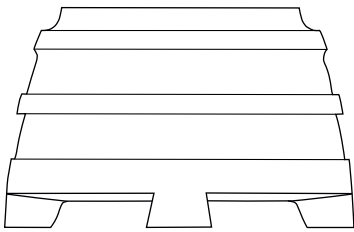
図1 合子形石製品実測図



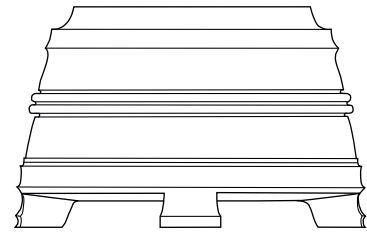
①原材料の削り出し



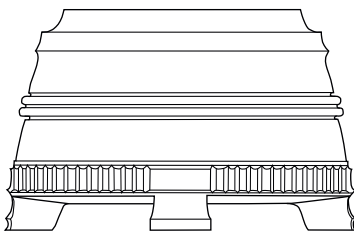
②内面の削り抜きと脚部の形成



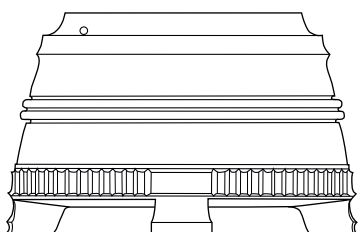
③凸帯の形成



④匙面および二重凸帯の形成



⑤縦条凸帯の形成



⑥紐孔穿孔および仕上げの研磨

図2 製作工程

### 3. 脚部形成における二者

関西大学博物館所蔵の合子形石製品を観察し、加工痕跡から製作工程を検討した。円形を呈する合子形石製品で脚を有するものには、西谷真治氏の分類によるJa1およびJa2があり〔西谷1970〕、定義上では大きさにやや相違点があるものの、関西大学博物館例はJa1に属するものと考えられる<sup>1)</sup>。西谷氏が指摘するように、両者は共通性があるものの、脚部の底面形態は異なる。そこで両者における脚部の加工方法に着目し、製作工程上の相違について考えたい。

Ja1は脚部の底面形態が半円形を呈するものが大半を占める<sup>2)</sup>。なかでも、脚部の底面形態が半円形のものと同方形を呈するものは、下面を十字に削り出し脚部を大まかに作り出したのち、脚部の角を研磨することによって半円形あるいは方形の脚部を形成している（遺物写真⑥）。それに対し、Ja2の脚部の底面形態は三角形を呈する。Ja2は下面を十字に削り出すことのみで脚部を形成しており、Ja1に比べて製作工程上の省力化が看取できる<sup>3)</sup>。

使用されている石材についても違いが指摘されており、Ja1には硬質の碧玉が、Ja2には軟質の緑色凝灰岩が使用される例が大勢を占める〔西谷1970〕。Ja1に使用される石材は硬質の碧玉であることから、加工には手間がかかることが推測できる。それに対して、Ja2は軟質の緑色凝灰岩を用いることから、Ja1に比べて加工における作業効率が向上、すなわち省力化を伴ったものと想定できる。Ja2の蓋の上面に放射状の線刻が施されるのも、加工がしやすいという材質の特性とも無関係ではないと考える。

上述したような形を決定付ける要因に関しては、これまであまり積極的な見解は提示されていない。また、製作工程における省力化という視点は、分類や変遷を考える際に有効な視点となるものと考えられる。

#### おわりに

関西大学博物館所蔵の合子形石製品を観察し、製作時に生じた剥離や研磨の痕跡からその製作工程について詳述した。また、脚部を有する合子形石製品の二者に着目し、製作の痕跡から双方の形を決定付ける要因について検討した。

古墳に副葬された合子形石製品は円形および楕円形のものがあり、それぞれに様々な特色がある。それらの分類や変遷観については既に言及されている〔西谷1970・赤塚1999〕。しかし、技術的な視点や製作工程における違いを踏まえた分類がなされているとは必ずしも言えず、変遷に関しても出土古墳の年代をもとに説明がなされることが多い。今後は技術的な視点や製作段階における加工方法などの視点をもとにした検討が必要となろう。合子形石製品に関する様々な課題については、別稿にて詳論したい。

本稿の執筆に際し、山口卓也氏、岩本崇氏には御高配ならびに御教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 関西大学博物館例は大きさの上では西谷氏の分類によるJa2に近い。その法量は現在確認できるJa1のなかで最も大きなものである。また、身は残存していないが、奈良県メスリ山古墳出土の蓋の破片は、復原すると関大博例の口縁部の大きさに近い数値となる。
- 2) 関西大学博物館例以外に脚部の底面形態が半円形を呈するものには、愛知県東之宮古墳例、奈良県島の山古墳例などがある。方形を呈するものは兵庫県城の山古墳例、京都府飯岡東車塚古墳例などがある。また、脚部が地に着かないが、大阪府弁天山C1号墳例も脚部の底面形態は方形を呈する。
- 3) 岐阜県坂尻古墳例や奈良県佐味田宝塚古墳例などが挙げられる。

## 参考文献

- 赤塚次郎 1999「容器形石製品の出現と東海地域」『考古学ジャーナル』No453 ニューサイエンス社  
関西大学博物館 1998『博物館資料図録』  
末永雅雄 1935『本山考古室要録』  
西谷真治 1970「古墳出土の盒」『考古学雑誌』第55巻第4号 日本考古学会  
T. KANDA 1884『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, & c., OF JAPAN』KOKUBUNSHA

## 本稿で言及した合子形石製品に関する文献

[坂尻1号墳]

西谷真治 1970「古墳出土の盒」『考古学雑誌』第55巻第4号 日本考古学会

[東之宮古墳]

赤塚次郎（編）2005『史跡東之宮古墳調査報告書』犬山市教育委員会

[飯岡東車塚古墳]

西谷真治 1970「古墳出土の盒」『考古学雑誌』第55巻第4号 日本考古学会

[弁天山C1号墳]

原口正三・西谷正 1967「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府教育委員会

[メスリ山古墳]

伊達宗泰（編）1977『メスリ山古墳』奈良県立橿原考古学研究所

[島の山古墳]

河上邦彦・西藤清秀・入倉徳裕（編）1997『島の山古墳調査概報』学生社

[佐味田宝塚古墳]

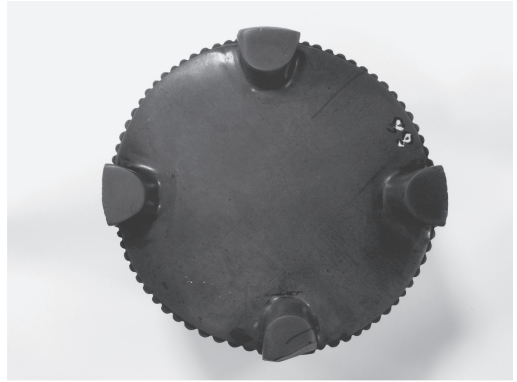
西谷真治 1970「古墳出土の盒」『考古学雑誌』第55巻第4号 日本考古学会

[城の山古墳]

櫃本誠一（編）1972『城の山・池田古墳』和田山町教育委員会



①上面から



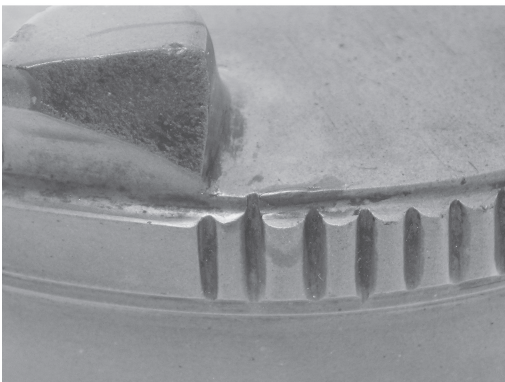
②下面から



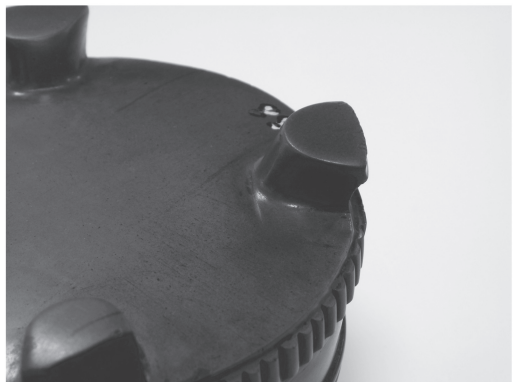
③側面から



④線刻がおよぶ



⑤下面におよぶ線刻



⑥脚部形成における研磨痕

## 遺物写真